

論文要旨

区分	甲	氏名	西村 佳菜子
論文題名 「明治期における「陶彫」の創始とその後の展開に関する研究 ―寺内信一と沼田一雅の比較を中心に―			
論文要旨 (2000 字程度)			
<p>日本では、陶土を用いた造形は、古代の呪術や地母神信仰用の土偶に始まり、古墳時代の葬送儀礼用の埴輪や、中世の信仰主題の狛犬等を経て、近世における仏教主題の陶作品や、香炉や置物へと展開、発展を遂げた。続いて、近代における西洋の美術教育制度や美術・芸術の諸概念、諸技法の導入によるあらゆる面での急速な革新、展開期を経て、現代では窯芸家が陶土を用いて立体の具象作品やオブジェを制作したり、彫刻家が素材として陶土を用いたりすることは珍しいことではなくなり、陶のマティエールが遺憾なく発揮された優れた立体作品が制作されるようになった。また、そうした状況と併行して、現在の日本の窯芸界や美術界では、陶土を素材として制作された彫刻作品やオブジェを指す言葉として、「陶彫」という用語が一般に使用されるようになっている。</p> <p>筆者は、彫刻制作者として陶彫制作を経験する中で、素焼きされた陶土が呈する温かく深みのある多様な色調や、施釉された作品のガラス質の表面がもつ柔らかな肌合いに魅了された。また、それと同時に、窯芸技法や素材に関する深い知識なしには、自身の完成予想像に近づけるのが困難であることにも、逆に醍醐味を感じた。そして、現代作家の陶彫や陶土素材のインスタレーション作品を数多く観る中で、作品の素材としての陶の可能性は極めて大きいと確信するようになった。以上のような自身の経験から、筆者は「陶彫」に興味を覚え、長い歴史的展開を見せた「陶」が、「彫刻」ないしは「窯芸」において、呪術や信仰、葬礼、茶道、装飾といった目的から離れて純粹に作品の素材として使用され始める時期や、その転換が何に起因しているのかについて、また、「陶彫」という用語がいつ誰によって使用され始めたのかについて、次第に疑問を持つようになった。しかし、それらの問題は未解明であるどころか、「陶彫」に関する研究自体が皆無に近いことが分かった。そこで筆者は、本論文において、以下の構成に従って、未解明の「陶彫」の創始者が誰であり、何故、またいつ陶彫が創始されたのかを解明するとともに、さらに開始期から現在に至るまでの展開を跡付けることで、今後の彫刻制作者、研究者として筆者がとるべき方向性を見極めることにした。</p> <p>まず、I 章では、後章における「陶彫」の創始と創始者に関する検証の前提として、古代から明治初期にかけての窯芸の発展、展開を、主に再現対象(主題)をもった陶土による形象品の主題や素材、技法、造形、使用目的、造形性等の時系列的概観と、表を用いた分析、並びに愛知県瀬戸市と豊田市の寺院での現地調査によって解明することを試みた。その結果、陶土による形象品は、窯芸全般の発展、展開を反映しながら展開し、古代では地母神信仰用の土偶や葬送儀礼用の埴輪、呪術用の形代^{かたしろ}、次いで中世では陶工による独創的な形体の狛犬、続いて近世では主題の形態や固有色の再現を試みた鑑賞性を重視した置物や香炉等が制作され、幕末になるとさらに宗教や伝説上の人物、僧侶の肖像等が制作され、その傾向は、開国から明治初期に至るまで継続さ</p>			

れたことが明らかとなったが、筆者は、それらを従来の型や像容を出ない、工芸的で前近代的な作品と結論付けた。

次いでⅡ章では、本論文で掲げた問題点の解明の鍵を握ることになる、明治期に西洋彫刻の影響を受けて「陶を素材とした彫刻」を制作するという、明治期の窯芸界において新しい試み、すなわち、陶土による彫刻(塑造)制作を行った2人の人物のうち、生年の早い寺内信一を取り上げた。そして彼の生涯や功績、先行研究、彼自身と弟子達の作品を、有田や常滑、砥部の窯元や資料館、教育施設での現地調査や文献収集によって得た情報を概観、分析することで、寺内は工部美術学校で学んだ西洋彫刻の技術や特徴を、明治17(1884)年に初めて陶土に応用し、その後も師ラグーザの白い大理石彫刻の影響を反映する作品を制作したことや、弟子達は寺内の作品の特徴である単色による写実的な具象表現といった諸点を受け継いでいること、また、彼に関する先行研究は僅少である上、言及のある論考中でも彼の位置付けは「ラグーザの生徒」や「諸教育施設の教員」に留まっていることを解明した。

続くⅢ章では、明治期の窯芸に新傾向を齎したいま1人の人物であり、後代に「陶彫の創始者」と評されることになる沼田一雅を取り上げ、福井県陶芸館や東京工業大学博物館での調査結果を基に、Ⅱ章と同様に、彼の生涯と功績、先行研究、彼自身と弟子達の作品の概観、分析を行った。その結果、沼田は東京美術学校で木彫や蠟型鑄造を学び、京都の陶工からの依頼で、寺内より16年遅い明治33(1900)年から陶土による彫刻制作を開始したことや、セーヴル製陶所に国費留学した後、官展第4部に陶作品を発表し始めた他、「日本陶磁彫刻作家協会」や「日本陶彫会」を設立したこと、また、弟子達は沼田の作品から強い影響を受けた作品を制作したこと等を解明した。

続くⅣ章では、本論文で掲げた問題に結論を出すため、Ⅱ、Ⅲ章における概観、分析結果を基に、寺内信一と沼田一雅を諸点から比較、分析し、併せて結果を表に整理した。その結果、後代に2人に対する評価の差が生じた理由は、支援者の有無や作品数、弟子の社会的地位等にあること、また明治期における「陶彫」の真の創始者、創始期は、それぞれ寺内信一、明治17年であると結論づけた。また、併せて、先行研究者による「陶彫」の諸定義を紹介、分析して、筆者自身の「陶彫」の定義を、「明治10年代後半以降に西洋彫刻の影響を受けて制作された、施釉や着彩の有無や技法には拘らない、陶土で成形し焼成した彫刻(塑造)作品」とした。

最後のⅤ章では、設定した、大正期以降の陶彫の現在までの展開と沼田一雅が意図した日展(帝展、新文展含む)における陶彫部門の確立の有無の問題は、まず前者は、寺内と沼田の弟子や孫弟子の作品並びに日本陶彫会の出品者や彼らの出品状況を、常滑の寺院や有田の窯元の現地調査と、日本陶彫会ホームページ掲載の出品者一覧の概観、分析によって、また後者は、『日展史』等の文献の概観、分析によって解明した。そして、寺内と沼田の作品の特徴はそれぞれの弟子達に受け継がれていることや、沼田が設立した「日本陶彫会」は、初期は官展である日展関係者による参加が多かったが、徐々に在野の団体関係者による割合が増えたことを明らかにすることが出来た。その他、同会の抱える問題点の明確化と、筆者が考えるその解決策の提示を行うとともに、官展における陶彫部門については、遂に確立されず、今後も確立は難しいと結論付けた。